平成26年度 1次公募 ものづくり･商業･サービス革新補助金

ものづくり技術
試作開発＋設備投資

ウェットスーツ用特殊素材を使用した防水バッグの試作開発

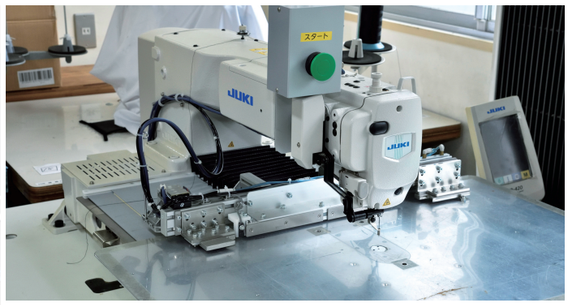
ヘルメット潜水株式会社

概要 防水性・弾力性・速乾性・強度・肌触り・断熱性・保湿性などの優れた特殊機能を持つウェットスーツ用素材・クロロプレンゴムを使用した防水バッグ「クロッツ バッグ」の試作開発。



完成した防水バッグ。違和感なく普段使いできる

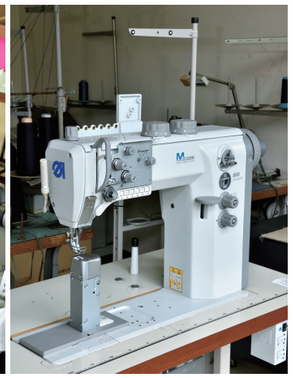

針が貫通しないので、縫い目からの浸水がない



ベルト部を縫う入力機能付き電子サイクルマシン



裏まで針が入らず、表面だけを
すくうように縫えるすくいミシン



１本針総合送りポストヘッドミシン。
部位によって複数のミシンを使い分ける

企業情報

会 社 名 ヘルメット潜水株式会社
代 表 者 代表取締役 伊賀 正男
所 在 地 〒873-0202 大分県国東市安岐町瀬戸田1300番地
T E L 0978-67-2251
F A X 0978-67-2377
U R L http://www.cloz.co.jp/

事業内容 ゴム製品製造販売
資 本 金 2,000万円
設　　立 昭和57年8月
社 員 数 27名



背景・経緯

長年培った技術で生まれた独自ブランド「CLO'Z」

ヘルメット潜水株式会社は、その名前が示す通り、潜水装備一式を製造販売する会社としてスタートした、国東市発のベンチャー企業である。30余年の長きにわたって国内外のブランドメーカーに協力することで培った裁断・接着・縫製などの技術には定評があり、10年前からはその技術を生かした独自の商品を生産し始めた。その第1弾が、ウエットスーツに使用される素材のクロロプレンゴムで作った湯たんぽである。

「やわらか湯たんぽ」の名で発売された商品は、保温性と断熱性にすぐれたクロロプレンゴムを使用することで、直接肌に触れても低温やけどしにくいという特徴が効果的に生かされた。さらに柔らかな触感と目新しさもあり、生産が追いつかないほどの大ヒット商品となった。

以降、このクロロプレンゴムを使った商品は「CLO'Z（クロッツ）」のブランド名でさまざまな商品が展開されることとなった。ちなみにクロッツとは、同社代表の故郷にある黒津崎海岸から命名されたという。

今回の事業では、表面だけを縫製する特殊なミシンなどを導入して、クロッツブランドの防水バッグを製作しようと考えた。

事業内容

潜水装備の会社だからたどり着いた“水に浮くバッグ”という発想

今回考案したのは完全防水機能を備えたバッグで、万が一、川や海に落ちた時には浮き輪代わりもなるというもの。日常的に使えるバッグであるということを重視したため、東京のデザイナーにデザインを担当してもらい、機能とデザインを両立させたバッグ作りを企画した。

まとめ

自社の特徴を
最大限に生かした
魅力ある新製品を
開発していく。

ものづくり補助金では、もっとも重要な防水機能を確保するため、奥まで貫通せず表面だけをすくって縫製できるミシンや曲面の縫製に使うミシンなど7台を購入。バッグの製作は初めてだが、これらの特殊なミシンの導入によって、社内での防水バッグ作りのメドが立ったという。

成　果

防災意識の高まりとともに存在感を増す防水バッグ

完成した防水バッグは、リュックやブリーフケース、トートバッグなど、サイズや仕様で６種のバリエーションがある。本体はクロロプレンゴムで、防水ファスナーを使うことでバッグ内部の気密性が保たれ、キャップ口から息を吹き込むことで荷物が入った状態のバッグでも大人が水に浮くことができるという。

もちろん、この高い気密性を実現しているのは、今回導入した特殊なミシンがあってのことである。完成したバッグは６月に大阪で開催された防災展に展示されて、高い関心を呼んだ。昨今の防災意識の高まりとともに、これからも存在感が増していく製品だと、同社では期待を寄せている。

ちなみにこの防水バッグは、やわらか湯たんぽとともに国東市のふるさと納税の返礼品にも選ばれているという。

展　望

独自の技術と発想で国東から世界へ発信

今はまだ６種しかないが、今後はさらにバリエーションを増やして、多彩なニーズに応えられる防水バッグを作っていきたいと担当者は語る。同社は防水バッグ以外にも、非常時に防災頭巾となる小学生用の防災グッズ・浮き浮きランドセルカバーや車イス用の各種カバーなども開発してCLO'Zブラントの存在感を増し続けているのだ。

ウエットスーツの材料という、ある意味では限られた人だけが使う特殊素材を、その特徴を生かしながら、すべての人が使える製品に変えていく。その柔軟な発想と自由な企業姿勢がある限り、これからもユニークで便利な製品を創造していくに違いない。